論文

虫を育て、闘わせる技法

――鹿児島県姶良市旧加治木町地域におけるクモ合戦の事例から――

小　林　兆　太

KOBAYASHI Chota

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　博士後期課程

【要旨】クモを闘わせる遊びの文化（本稿では「クモ合戦」と記述）は、日本列島の太平洋側沿岸部を中心に広い範囲に分布していたことが先行研究で明らかにされており、現在でも日本国内のいくつかの地域でその大会が開催されている。本稿では鹿児島県姶良市旧加治木町地域で年に一度開催されているコガネグモ（Argiope amoena）を用いた大会「姶良市加治木町 くも合戦大会」を対象として、2016年から2019年にかけて筆者が行ったフィールド調査をもとに事例研究を行った。調査によって、これまでは充分に扱われてこなかった、クモ合戦がどのように行われているかという実態を明らかにすることを目指した。これは、クモ合戦文化の特徴を整理し、闘牛や闘鶏、闘犬などといった、他の生き物を闘わせる遊びの文化の中でどのように位置づけることができるのかを今後論じていくためのものである。大会参加者による活動の中でも、特にクモの採集と育成について本稿では論じた。加治木町地域で行われるクモ合戦では、クモを強く育て上げるために、特に様々な手段が用いられているためである。その結果、①加治木町のクモ合戦では大会参加者の間で用いられるクモに関する知識に違いがあること。②同じ知識とクモの飼育場を共有するいわゆる“チーム”が複数存在し、多くの場合それは家族であること。という二点の特徴を本稿では指摘したい。これは、複数のクモの飼育には自宅の一部を開放するなど広い空間を必要とするコガネグモの生態にも起因するものである。また、チームの存在は加治木町におけるクモ合戦文化の伝承の上でも大きな役割を果たしている。これらの特徴は、同じく“虫”を闘わせる遊びである中国の闘コオロギの文化と比較すると対照的な傾向を示すものであるといえる。その一方では、闘鶏などに見られるような生き物の品種改良や家畜化が、クモ合戦と闘コオロギには見られないという共通点も指摘できる。

Technology to Insect Fighting：
Case Study of Spider Fighting in Kajiki in Kagoshima Prefecture

Abstract : Previous studies have shown that the culture of play that makes spiders fight (following, “Spider Fighting”) was widely distributed around the Pacific coast of the Japanese archipelago, and the tournament is still being held in several parts of Japan. In this paper, we conducted a case study of field surveys conducted for the “Kajiki Town in Aira City:Spider Fighting Tournament” using KOGANEGUMO, which is held once a year in the Kajiki Town area in Aira City, Kagoshima Prefecture. As a result, we aimed to clarify the actual situation in the field where the spider fighting is being carried out, which was not well handled in previous research.

This is to sort out the characteristics of spider fighting and discuss how they can be positioned in a culture of play that makes other creatures fight. Among the activities by the participants of the event, the collection and development of spiders in particular was arranged in this paper. As a result(1) In the spider fighting in Kajiki Town, there is a difference in the knowledge of spiders practiced among the participants of the tournament.(2) There are multiple groups that share the same knowledge and spider rearing room, and in many cases it is a family.I was able to organize the features of the above two points.This is due to the ecology of the spider which needs a large space for multiple rearing, and it has a big influence on inherit of the spider fighting culture in Kajiki Town.

はじめに

人間は農耕や牧畜、狩猟といった目的に応じてウシやブタ、イヌなどといった人間以外の生き物と関わり、生活するための資源を得てきた（卯田 2017）。しかし一方、人間が人間以外の生き物と関わる場面はそういった、いわゆる生業の場面のみには限らない。愛玩の対象としてのペットや、さらには闘鶏や闘牛などといった、人間の手によって闘わせる遊びの手段としても用いられる。本稿は日本の鹿児島県姶良市旧加治木町地域で「姶良市加治木町 くも合戦大会」と題して開催されている、“クモを闘わせる遊び”（以降「クモ合戦」と呼称）の事例を取り上げ、現地でのフィールドワークを中心に収集した資料を考察し、クモ合戦の実態を明らかにしていくことを目指す。さらには、クモ合戦の研究を通して、この文化が他の生き物同士を闘わせる文化の中でどのように特徴づけられ、位置づけることができるのかを考察するものである。

動物を闘わせる遊びの研究としては、例えばギアーツはバリ島の闘鶏を調査し、闘鶏という競技をめぐって行われる賭博などといった人間同士の関係性や、闘うニワトリを通した人間の意識について論じている（Geertz 1973 吉田禎吾（ほか）訳 1987）。その他にも今日に至るまで、動物を闘わせる遊びの文化に関しては人類学・民俗学・文化地理学といった複数の学問分野に様々な研究が存在している。闘鶏については上記のバリ島のほかにも、フランスのカレー地方における事例について小川了による文化人類学的研究が存在しているし（小川 1975）、また日本の闘牛については、近年における存続理由を、地域をまたいだ闘牛士同士の交流に求める視点に立った民俗学的、あるいは文化地理学的研究がいくつか行われている（石川 2004、2005; 西村・桑原・尾崎 2007）。

しかしその一方で無脊椎動物、特に節足動物、つまりは“虫”と呼ばれるような生き物を用いたこの種の文化に対する研究・議論はこれまであまり深められてきてはいない。そんな中で比較的盛んに研究が行われているといえる事例のひとつは、中国におけるコオロギを闘わせる遊びの文化に対してのものである。これについては菅豊や Hugh Raffles が文化人類学的、あるいは民俗学的な論考を著している（菅 1999;Raffles 2011）。菅は闘コオロギをめぐって存在する人間関係について、コオロギを採集・販売する人々や、それを購入し、育て、そして闘わせる人々といった分業の実態を明らかにしている。他方 Raffles は、唐の時代から文字記録として蓄積されてきた闘コオロギに関する育成や闘わせ方といった知識の歴史についても論じている。両研究が扱っている範囲には重なる部分がかなりあるものの、現状はそれぞれが別個に調査・研究を行っているに留まっている。

今回事例として扱うクモ合戦についての研究はこれらに比べてさらに少ない。地域ごとの記録・報告などは散見されるものの、クモ合戦全体について体系づけられた研究としては、斎藤慎一郎と川名興によるものがほぼ唯一となる。両氏は共著『クモの合戦 虫の民俗誌』（川名・斎藤 1985）にて、地域に残る記録などを用いて日本全国におけるクモ合戦文化の分布図を作製し、かつては日本列島の太平洋側沿岸を中心に広く行われていた遊びであることを明らかにした。さらにクモ合戦の起源・伝播について考察し、この遊びを漁民の占いなどといった文化と関連づけて論じている。

両氏による先行研究は日本列島全域のクモ合戦について広く論じたという点において、現在も参考となるものであるが、事例研究としては調査対象が広範囲にわたっているために総括的なものとなっている。各地におけるクモ合戦がそれぞれどのように行われているのか、詳細に記述・検討した研究は未だ充分に行われてきてはいない。

本稿の構成として、はじめに加治木町におけるクモ合戦で用いられるクモ「コガネグモ」について述べ、次に試合（闘い）のルールについておさえた後、加治木町と「姶良市加治木町 くも合戦大会」の歴史をまとめる。それら基本情報を確認した上で、筆者が 2016 年から 2019 年にかけて行った調査で収集した事例を用いて考察を行う。調査方法としては大会参加者へのインタビューと、クモの育成や大会の試合の現場の観察、そして大会そのものへの参与を実施した。今回はそれらを通して収集した資料の中でも、クモの採集・育成の場面に焦点を当てて整理する。詳しくは後述するが、大会に臨むにあたっていかに強いクモを手に入れるかという点において、採集・育成の場面では特に様々な工夫がこらされているためである。それらを踏まえ、加治木町におけるコガネグモを用いるクモ合戦の特徴を“ヒトとクモの関係”、“ヒトとヒトの関係”といった観点から考察していく。

なお、本文中の記述において、『「」』は文献からの引用や、収集した事例の中で実際に確認できた語彙、『“”』は筆者が本稿を執筆するにあたって強調したいと考えた部分に対してそれぞれ用いた。

Ⅰ．コガネグモのクモ合戦

(1) 闘うクモ

標準和名でコガネグモと呼ばれるクモ（学名 Argiope amoena. 以下、生物名は断りがない限り標準和名にて記述）は、生物学上の分類ではクモ綱クモ目新蛛亜目コガネグモ科コガネグモ属に属する種である。オスは平均で体長 5mm 程だが、それに対してメスは平均で体長 20 ～ 30mm とかなり大型になる（八木沼 1986）。この種は糸を吐いて木の枝などに円形の巣を作る生態を持っている。コガネグモのメスは野生下において積極的に同種で闘う生態を持っていないが、接近した外敵を排除しようとする行動を利用してクモ合戦が行われていると考えられる。

日本列島のクモ合戦において用いられるクモは、先述した斎藤・川名による先行研究に記述があるものではコガネグモのほかにジグモ、カバキコマチグモ、ハエトリグモなどがある。中でもハエトリグモの一種であるネコハエトリを用いるクモ合戦については、現在においても神奈川県横浜市や千葉県富津市で毎年愛好家による大会が開催されている。(1) (2)

写真 1：加治木のクモ合戦で用いられるコガネグモのメス。 2018 年 6 月 17 日 筆者撮影

(2) コガネグモのクモ合戦

コガネグモを用いたクモ合戦は、本章で主に扱っていく加治木町の事例をはじめとして多くの場合、一本の横棒の上を舞台として行われる。棒の中程にとまらせたクモが先端まで移動しようとする性質を利用し、先に棒の先端に待機させておいたクモと正面から接触させ、闘わせるのである。しかし、先述したようにコガネグモは生態としては同種で闘うことがなく、互いに外敵と認識させて闘わせるためにそれは度々殺し合いにも発展する。そのため、コガネグモを用いるクモ合戦においては、人間が定めたルールの上で勝敗を判定し、互いに傷つけ合う事態になる前にクモを引き離さなくてはならない。詳細なルールについては加治木町における大会の情報とともに後述することとする。

コガネグモを用いたクモ合戦は斎藤・川名が作成した日本全国における分布図の中でも他の種のクモを用いるものよりも広く、主に九州から房総半島にかけての沿岸地域で広範囲にわたって行われていたことが分かっている。現在でも、加治木町を含む九州各地や、高知県、和歌山県の一部などで毎年、各地で結成された保存団体主催での大会が行われている。

写真 2：「姶良市加治木町 くも合戦大会」試合の様子。 2018 年 6 月 17 日 筆者撮影

（3）調査地・調査対象

① 鹿児島県姶良市旧加治木町地域

鹿児島県姶良市旧加治木町地域は鹿児島湾の最奥部の沿岸に位置する港町である。この地では毎年、「姶良市加治木町 くも合戦大会」というコガネグモを闘わせる大会が開催されている。この加治木町地域において、コガネグモは方言名で「ヤマコッ」「ヤマコブ」などと呼ばれている。歴史的に島津氏と関わりが深く、戦国大名の島津義弘が最後の居館を構えた地でもある。そのため、名所旧跡や名産品など地域に関わる様々な事物に島津義弘に関する伝説が残されている。この地で行われるクモ合戦もそのひとつで、島津氏が文禄・慶長の役に出兵した際に、陣中にて島津義弘が兵を勇気づけるために、クモを闘わせてみせたことがはじまりであると由来が語られる。大会会場で配布されるパンフレット『くも合戦大会規則』（姶良市加治木町くも合戦保存会 発行年不明）内の記述は次のとおりである。

> 「文禄・慶長の役において薩摩の殿様、島津義弘公も加治木から多くの兵士を連れて参戦しました。
> 加治木のくも合戦は、その陣中で義弘公が兵士を元気づけ、励ますために、こがねぐも（メス）を集めて戦わせたのが、始まりであると伝えられております。義弘公の城下町であった加治木に当時から受け継がれてきています。」

この伝説的なエピソードについては、「姶良市加治木町 くも合戦大会」が鹿児島県の民俗文化財に指定される際に発行された『加治木のくも合戦の習俗調査報告書』に川嵜兼孝による論考が存在する（鹿児島県加治木町教育委員会 1999:69-106）。これによると中世期の文献を見る限りでは、文禄元年（1592 年）に島津家の家臣である梅北国兼が起こした反乱「梅北一揆」について書かれた「義久公御譜中」などの記録の中に、「山蜘（ヤマコブ）」を名乗る「剛強・剛勇の者」がいたという記事は複数確認でき、当時からクモが武勇と結びつけられて捉えられていたことは確認できる。しかしながら島津義弘とクモ合戦を結びつけるような事実は確認できないことが述べられており、その上で加治木町におけるクモ合戦についての最も古い記録は大正 12 年（1923 年）6 月 19 日付けの『鹿児島新聞』に掲載された記事であるという。川嵜は「義弘起源説」がクモ合戦において語られることの効用について、高知県四万十市中村（川嵜の論文中では中村市）で行われているクモ合戦の事例と比較しつつ述べている。中村においても、クモ合戦の起源を京の都から応仁の乱を避けて逃げ延びてきた一条氏の女官が伝えたものと説明しているが、確たる歴史的証拠は存在しない。加治木と中村の両地にて、こうした伝説的なエピソードが盛んに用いられていることによって、クモ合戦に臨む者は闘うクモを通して自らを合戦に赴く武将や武士に重ね合わせ、そこに意義を見出す。このことはさらには、クモ合戦の文化そのものを権威づける効果ももたらしたのではないかと川嵜は指摘している。

現在の加治木町の中で、クモ合戦の文化はある程度の存在感を持っており、加治木駅構内の表示や駅前のタイルからはじまり、加治木町内各地のバス停の標識全てにコガネグモの意匠があしらわれている光景を見ることができる。

②「姶良市加治木町 くも合戦大会」

大会は現在、毎年 6 月第 3 日曜日に「加治木福祉センター」の体育館を会場として開催されている。鹿児島新聞の記事に書かれた 1923 年から大会名や主催組織の形、開催場所などを変えつつも継続して行われてきており、これまでで中止となった経験は 3 回のみである。1 度目は太平洋戦争中となる 1942 年～ 1945 年の期間、2 度目は 2010 年の口蹄疫流行の際、3 度目は 2020 年の新型コロナウイルス流行の際である。2 度目の中止は参加者に畜産業の関係者が多かったこと、疫病の流行の中で多人数での移動を極力避けたいことが理由であった。鹿児島県域におけるクモ合戦と畜産の関係は大会に際してのクモの採集という場面にもあり、これについては節を改めて詳しく述べる。

大会名・主催団体名の変遷の一端を伺うことができる資料が、姶良市加治木郷土館に保存されている。過去に行われた 2 回の大会の優勝旗であり、正確な年代は不明であるが、ひとつは主催団体名として「加治木蜘蛛同好会」、ひとつは大会名として「ヤマコマッキャセ大会」と、それぞれ現在とは異なった主催団体名と大会名が記されている。

大会への参加者の年齢層としては、以前から大人が熱心に参加していたようである。上述の川嵜による論考の中にまとめられている加治木のクモ合戦に関する各年代の記述を見ると、例えば 1923 年 6 月 19 日、初めて『鹿児島新聞』に掲載されたクモ合戦に関する記事では「（～）土地の老若男女を問わず蜘蛛家連が（～）」とある。1997 年 3 月に発行された『加治木文化』に収録されている松田繁美という人物による「昭和初期のくも合戦」では、男たちでひしめきあい賭博場さながらの様相となっていたという「昭和初期」のクモ合戦大会の会場の様子が語られている（加治木町文化協会「加治木文化」編集委員会 1997:76-77）。こうしたクモ合戦に熱中する大人は現在においても当然おり、そう

した者のことを指して「ヤマコツキッゲ」と呼称するのだということを、『加治木のくも合戦の習俗調査報告書』の中で寄稿者の１人である新福貢は述べている（鹿児島県加治木町教育委員会 1999:9-18)。筆者も調査の中で、同じような性質の人間を指す語句として「クモキッゲ（“クモに夢中になっている人”の意)」という表現を耳にすることがあった。

「姶良市加治木町 くも合戦大会」は「優良ぐもの部」「合戦の部」「王将戦の部」の三つの部門から構成されている。三つの中で「優良ぐもの部」は「くもの美しさ」を二つの基準（後述の公式ルールを参照）から競うものであり、クモを闘わせるものではない。「合戦の部」は参加者１人が３匹の手持ちのクモを１匹最大３回勝ち抜きで闘わせて得た勝ち点の合計によって成績が決められる。これら３部門が終わった後、大会の最後に行われる「王将戦の部」には「合戦の部」の試合で３連勝、つまり最大の勝ち点を得たクモのみが参加し、トーナメント形式でその年の最も強いクモが決められる。また、「合戦の部」と「王将戦の部」には、小学生同士が対戦する試合が「子供の部」として設けられている。

以下に、大会会場で配布されるパンフレット『くも合戦大会規則』（姶良市加治木町加治木くも合戦保存会 発行年不明）に記載されている公式ルールを記す。

（原文ママ）

優良ぐもの部

１． 審査基準

⑴ 八頭身ですらりとしたスタイル。⑵ 色艶が良く形や姿が整っていて美しいこと。

合戦の部

１． 出場等

⑴ １人必ず３匹のくもを出場させること。（くもはこがねぐものメスに限る。）

⑵ １匹のくもは、最大３回対戦する資格を持つ。

⑶ 負けた時点で、そのくもは出場の資格を失う。

２． 試合方法

一本の横棒の先端に「かまえ」と称するクモを待機させ、「しかけ」の対戦ぐもを行司が仕切って向かい合わせた上で対戦させる。

３． 勝敗の見分け方

⑴ 相手のくもの後背尻（加治木でドンという）に、平たいくもの糸をかけたものが勝ち。

⑵ 同後背尻（ドン）にかみついたものが勝ち。

⑶ 相手のくもが糸を垂れて横竹からぶら下がったのをすかさずその糸を切り落としたものが勝ち。

⑷ 戦闘意欲のないくもは、行司の判断により引き分けとする。 ※このくもの勝負は動きが早いため、以上の動きを熟練した行司の鋭い真剣な目が、瞬時のかけひきを判定する。

王将戦の部

１． 合戦の部で３勝したくも（「３勝ぐも」という。）のみが、参加資格を持つ。

２． 王将戦は、抽選は行わず、合戦の部の順番で右側からトーナメントを組む。

（引用以上）

クモ同士が闘う舞台は会場内３か所に作られ、「合戦の部」が行われている間は三つの試合を同時進行していくことで、午後から行われる「王将戦の部」までに全試合を決着させるようになっていた。舞台は、竹で作られた縦の支柱と、それを貫く形で「行司」の目線の高さに固定された「ヒモシ」と呼ばれる横棒からできている。「ヒモシ」はセイタカアワダチソウの茎を乾燥させて作られたもので、支柱から 65cmの長さになるよう調節されている。この「ヒモシ」の上で２匹のクモが闘うのである（図1、2、3 参照）。

コガネグモを闘わせるにあたって、勝敗の判定には人間によって決められたルールが用いられる。それはいわゆる相撲における“決まり手”とも呼べるもので、「姶良市加治木町 くも合戦大会」では会場で配られるパンフレットの中に公式ルールが説明されている。勝ち負けは「ヒモシ」の前に座った審判である裃を着た「行司」が判定し、クモが傷つけ合うことになる前に引き離すのである。

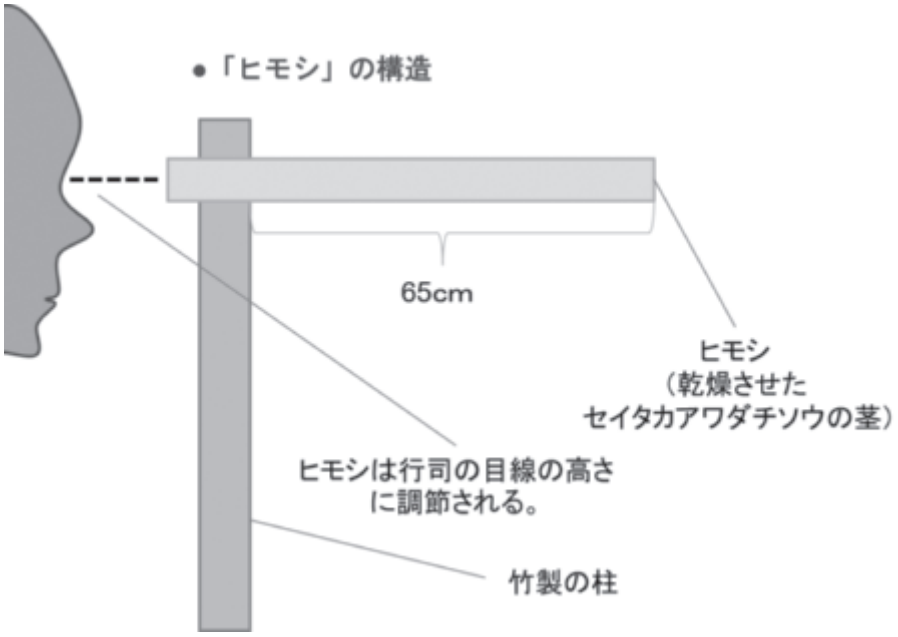

図１：「ヒモシ」の図解。クモが闘う棒の範囲は 65cmに揃えられている。筆者作製

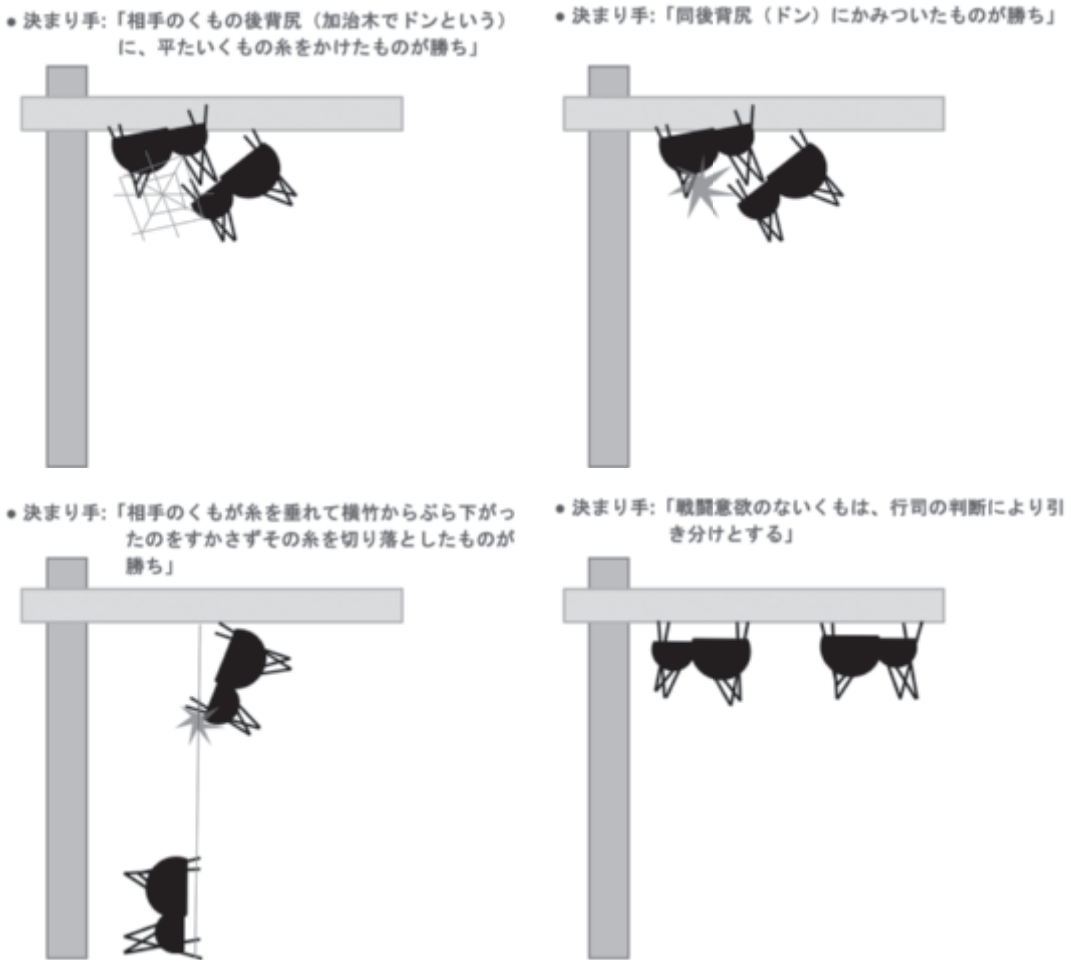

図 2、3：試合ルールの図解。多くの場合、より上の位置をとったクモが有利となる。 筆者作製
（「」内は『くも合戦大会規則』の公式ルールより。原文ママ）

「行司」は大会の主催である「姶良市加治木町くも合戦保存会」の会長を含む 3 ～ 4 人の役員が務め、この「行司」たちは大会への参加資格を持たない。「姶良市加治木町くも合戦保存会」の役員は 2019 年大会の時点で 23 人により構成されており (鹿児島県姶良市企画部商工観光課 2019)、会長をはじめ「行司」を務められるような中心メンバーはいずれも長くクモ合戦を行ってきた人たちである。会場では、各部門と来場者全員参加のくじ引き大会に地酒や饅頭、自転車や日用品など多くの景品が用意されている。それらは保存会の会員が直接調達するものに加えて、姶良市の商工会の協力にも支えられている。大会の初めには来賓として姶良市の市長や市議会議員も参席するなど、「姶良市加治木町 くも合戦大会」は地域の中の様々な層の人々に意識されている行事であることがうかがえる。

それだけに参加者も多く、2019 年大会には熊本県や宮崎県といった九州地方を中心とした県外からの参加者も相当数あり、「合戦の部」では大人と子どもを合わせて 124 人がエントリーした。その中で勝ち進むため、上位の成績を収めるベテランの参加者たちはそれぞれ、クモ合戦の様々な場面において勝つための工夫を行っている。次章からは、大会を勝ち進むために参加者はクモとどう接しているのか、クモの採集から育成、大会前日までの各場面を見ていく。

Ⅱ．クモ合戦におけるクモの採集と育成

(1) 整理方法

本稿のはじめに述べたように、クモ合戦の現場で何が行われているのか、実態を明らかにするために、ここでは大会を中心とした参加者のスケジュールを時系列に記述していくこととする。具体的には大会前日までの大会参加者の行動を、採集、育成、大会前日と三つの節に区切り、事例の整理を行う。以下における個人名については、姓にあたる大文字の“A,B,C,……”と、それに続く名前にあたる小文字の“a,b,c,……”の二文字の組み合わせで表記した。

(2) 採集

『加治木のくも合戦の習俗調査報告書』の記述によれば、現在、加治木町におけるコガネグモの生息数は減少し、大会に参加するために満足のいくような採集は行えないという。そのため、個人差はあるものの鹿児島県内では多くの参加者が採集場所として大隅半島や薩摩半島を答える。これらの地域には畜産関係の施設が多く存在する。先述したように、クモ合戦に際しての採集と畜産には関係があり、これは畜産関係の施設にクモの餌となるハエが多く発生することが理由である。牛舎などの周囲にハエを求めてクモが巣を張るため、採集に適しているのだという。2010 年の口蹄疫流行の際、大会が中止となったのも、こうした畜産関係施設の周辺に多くの人が訪れることで病原体を拡散させてしまうことを危惧しての判断であった。

以下、「姶良市加治木町 くも合戦大会」への参加者の事例について、個人ごとに整理して記述していく。

加治木町出身で 1955 年生まれの Aa 氏の事例を見ていく。Aa 氏は大会を主催する「姶良市加治木町くも合戦保存会」の会員として試合では行司を務めており、本人自身は先述のように大会への参加資格を持たないのだが、Aa 氏が自宅で育てたクモを Aa 氏の妻である Ab 氏や、大会にあわせて帰省する家族がそれぞれの手持ちとして参加している。このように、クモの飼育を共有し、大会参加を分担する“チーム”を作るような参加形態は他にも多数見られるものである。Aa 氏は小学校卒業までは友人間でクモ合戦を行っていたものの、その後クモ合戦から離れていた。再開し、大会に関わることとなったきっかけは、自らの息子である Ac 氏が小学生の頃に大会の「合戦の部」に参加したことであるという。さて、A 一家は普段、Aa 氏と Ab 氏以外は離れた地域に住んでいるため、大会前の採集・育成は Aa 氏と Ab 氏の 2 人で行うこととなる。採集を始めるのは大会の約 1 か月半前の 5 月初旬である。はじめに前年の大会後にクモを逃がしに訪れた際、目星をつけておいた場所を探す。しかしほとんどの場合 1 年経過すると環境は変わってしまっているといい、毎年新しい採集場所を探すこととなる。このように、クモの採集は良好な採集場所の下見から始まる。良好な採集場所の基準は参加者によって様々で、各々がその年見つけたいわゆる「穴場」は絶対に他人には教えようとしない。家族に対してすらも秘密にする参加者もいるのだという。

現在の「姶良市加治木町くも合戦保存会」の会長であり、Aa 氏と同じく加治木町出身で、1956 年生まれの Ba 氏もまた、大会の 1 か月半前から採集を始める。Ba 氏は高等学校卒業からの 5 年間は仕事のため加治木町を離れていたが、その後加治木町に戻るとともに当時のクモ合戦の大会主催団体に

入り、以降は現在に至るまでクモ合戦を続けている。Ba 氏もまた大会の運営側であるため出場権を持っておらず、その家族が出場することとなる。B 一家の大会参加については、2019 年大会にて、ある程度詳細な調査を行うことができた。これについては先述した“チーム”での大会参加を説明するため、後ほど節を改めて詳細に述べることとする。Aa 氏も Ba 氏も、採集に訪れるのは他の多くの参加者と同じように大隅半島や薩摩半島の方面であるという。Ba 氏は竹製の棒の先に円形の枠を付け、そこに網を張った自作の採集道具を用い、クモを巣ごと捕まえる（写真 3、4 参照）。Ba 氏が小学生だった頃、上級生は「潮風に吹かれて育ったクモは強くなる」と言って、海に面した岸壁に生えた木などに巣を張っているクモを好んで採集し、人為的にその環境を作り出すために採集したクモに霧吹きで潮水を吹きかけることもあった。しかし Ba 氏の話では、現在ではそのような採集を行う者はいないのだという。

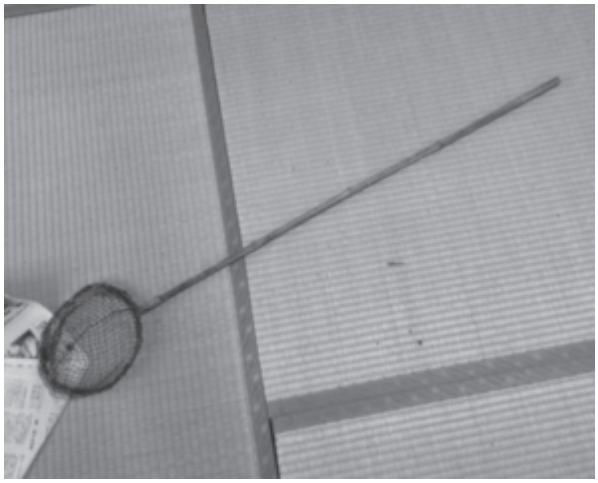

写真 3、4：Ba 氏が使用しているクモの採集道具。飼育場のクモを扱う際にも用いる。2019 年 6 月 15 日 筆者撮影

1956 年生まれの Ca 氏は上述した 2 人とは異なったスケジュールで採集を行う。大会当日の 3 日前から採集を始めるのである。Ca 氏は加治木町出身、加治木町在住。大会の主催側には所属しておらず、妻である Cb 氏との 2 人で参加する。参加し始めて 20 年ほどになり、「王将戦の部」にも度々クモを進出させているが、Aa 氏や Ba 氏のように 1 か月以上の期間で採集を行わないのは、Ca 氏が鉄道会社に勤務しており、多忙なためであるという。基本的に 2、3 日前、早くても 1 週間前からの採集としており、それ以上前に採集したクモは大会前に産卵してしまう危険性が高まるのだという。この、クモが産卵することの意味についても節を改めて後述する。

熊本県天草市在住、1957 年生まれの Da 氏は採集の開始をゴールデンウィーク後からと決めている。Da 氏もまた幼少期から周囲の大人や学校の上級生から教わってクモ合戦に興じていた 1 人である。中学生のときにテレビで加治木町のクモ合戦が紹介されている番組を見たことで本大会の存在を知り、後に参加を始めて約 20 年になる。家族だけでなく、知人同士でも誘い合わせて参加しており、2018 年大会では 11 人での参加となった。基本的に Da 氏が採集し、自宅で育成したクモをそれぞれが手持ちとしている。採集に向かう地域は広く、熊本から宮崎、そして鹿児島の薩摩半島と、2019 年には 2000km の距離をクモを求めて移動したのだという。採集は河川敷や用水路などの水辺、セイタカアワダチソウの群生する場所を狙って行う。Da 氏は、大会で好成績を残す参加者が訪れる採集地には、毎年の大会後にその参加者が育てたクモが放されるため、それらの子孫として強いクモが生まれやすくなっているのではと推測している。

多くの場合、参加者は A 一家のように大会当日の 1 か月ほど前から採集を始め、自宅でのクモの育成と並行して行っていくのであるが、中には C 一家のように大会前 1 週間ほどから、自然下で成熟した個体を採集して出場する参加者もいる。C 一家はそのように特殊な採集方法を行っているにもかかわらず「王将戦の部」常連のベテランであり、採集の方法やスケジュールだけを見てもその手法は様々に異なることが分かる。

ただし、これまで採集に実際に同行する調査を行うことができていないため、クモの採集方法や採集道具については今後より詳細に記録し、明らかにしていく必要がある。

(3) 育成

参加者は採集したクモを自宅で飼育するとともに、大会当日に向けて試合に勝てるクモとなるように育成していく。コガネグモは人間の頭上などといった高い位置に巣を張る性質があり、多数の個体の飼育にはそれなりのスペースが必要となる。そこで、一部の参加者はクモの飼育場として、庭木や自宅の一室などを用いる。このように大会に際し、飼育場を整備する点が、加治木のクモ合戦における特徴的な要素のひとつであるといえる。

例えば A 一家は採集を始める大会 1 か月前になると、自宅のベランダにネットを被せて中に木の棒を張り巡らせ、飼育場を作る。この中でクモが放し飼いにされるのである。クモの餌としては、「カナブン」と呼称しているコガネムシの一種を与えている。

B 一家は飼育場として自宅の一室を使用している。クモが巣を張りやすいように鴨居などの上に木の枝を立て、床にはクモの食べ残しや排泄物が落ちても汚れないように新聞紙が敷かれる。Ba 氏は 20 代で大会主催団体に入った頃から、この自宅に放し飼いにする方式の飼育を行っているのだとい

う。これは当時、団体内でいわゆる“名人”とされていたS氏にならったもので、野鳥の被害を回避することを狙ったものであった。飼育場で育成するクモは2019年において、およそ50匹であった。クモの餌としてA一家と同じく「カナブン」を与えている。餌の他にも水分が必要であり、給水には霧吹きを用いる。前述の中で、かつてクモに潮水を吹きかける者がいたという事例を紹介したが、このほかに以前は焼酎や栄養ドリンクを混ぜた水を与えていた者もいたのだという。

写真5：室内で放し飼いされているクモ。2019年6月15日 筆者撮影

Aa氏曰く、クモ合戦で最も重要となる要素は餌の与え方であるという。この与える餌についても、参加者によってそのスタンスは異なったものとなっている。ここではA一家とB一家の事例を比較する。前述のように両氏ともクモの餌として、「カナブン」（標準和名でカナブンと呼称されている種とは別種。スジコガネ亜科の一種を用いていると思われる）を用いている。この「カナブン」と呼称される区分の中には褐色の種と緑色の種がおり、A一家は両方を餌として用いる。これに対し、B一家は緑色の「カナブン」のみを餌として用いる。Ba氏は、褐色の種よりも緑色の種の方が体格が小さい傾向にあることを理由としている。曰く、クモを育成するにあたっては餌をなるべく多く食べさせる必要がある。しかしクモが一度に食べることができる分量には限界があるため、タイミングを計って与える「カナブン」の数を調整しなくてはならない。このとき、なるべく体格の小さい「カナブン」を用いることでより細かい調整を容易にしているのだという。それに対して「カナブン」の種類を区別しないA一家であるが、Aa氏は「カナブン」の種類にこだわって餌不足に陥ることを危惧し、継続的に全てのクモに餌を与え続けるためにB一家とは違う餌の選択をしている。餌の与え方にも、参加者によって手法の違いが表れている。

1950年生まれ、宮崎県在住のEa氏はかつて「王将戦の部」での優勝経験もある人物であるが、

2018年の大会ではDa氏の“チーム”の一員として、Da氏の育てたクモを手持ちとして参加していた。しかし、2019年大会では自ら育成したクモで参加している。2019年大会におけるEa氏の特徴は、採集を行っていないという点である。つまり、Ea氏はクモを卵から人間の管理下において育成していたのである。これまで筆者が行ってきた調査の中で、クモの卵から成体までの全生活史を人間の手で管理していた参加者はEa氏がはじめてであり、それ以外の参加者はある程度自然下で育った個体を採集するという手法をとっていた。例えばAa氏もまた卵からの育成を試みたことがあると語るが、微細な幼体の扱いは難しく成功したことがないのだという。Ea氏はクモの成長段階にあわせて餌を「カ→ハエ→バッタ……」といったように変えていくことによって、1年の期間をかけて成体まで育て上げることに成功していた。他にも育成の際、Ea氏はクモを屋外で育成するようにしており、これはEa氏が言うところの「ミズケ」（おそらくは水分）が充分に与えられなければ上手く育たないからであるという。

(4) 大会前日と 参加者の“チーム”

自宅内の空間を改造するような飼育方法では、当然生活を共にしている参加者の家族もクモに関わらざるを得なくなる。ここで先述したA一家の大会への参加形態が現れる。つまり、家族のほぼ全員が大会への参加者なのである。それどころか、A一家をはじめとしたこの参加形態では、大会への出場のために普段は遠方に住んでいる息子・娘とその家族も帰省し、一族総出となることもある。こうした参加形態は「王将戦の部」へ進出する強豪の中に非常に多く見られる。B一家も、同じように総出で大会へ出場する。B一家の場合はクモの採集を始めると自宅の一室に新聞紙を敷き、クモが巣を張りやすいように鴨居などに笹の枝を立てて飼育場とする。2019年大会において、B一家からは7人が出場した。この年の大会の前日に行われた手持ちの選別作業を見ていく。

大会前日の2019年6月15日（土）、この日は13時より大会会場である加治木福祉センター体育館にて翌日の準備が行われていた。これに保存会の会員として参加していたBa氏は解散後、17時30分に帰宅するとその後到着した息子であるBc氏とともに翌日出場させる手持ちのクモを選ぶ作業を始めた。

クモの選別は、飼育場から出場候補のクモと、出場候補ではないが飼育場の中で比較的体格に優れるクモを一匹ずつ選び、その場で闘わせることで行われる。その結果を見て最終的に出場させるか、家族の中で誰の手持ちとするかの判断をし、一匹ずつ持ち運びのために網袋に入れて分けていく。このときの判断材料は勝敗のみによるものではない。例えば、出場候補のクモが勝利したとき、その勝ち方が接戦の末の勝利であった場合、さらに1回別のクモと闘わせることがある。これは、その出場候補のクモが本当に強いクモであるかどうかを測る目的とともに、闘いに何度も勝たせることでクモのコンディションを試合本番へ向けて整える目的もある。この、格下と闘わせて勝たせる行為は「ダシをつける」という言葉で表現される。この言葉は応用して、勝利を経験した状態のクモを「ダシが効いた」と表現したり、闘わせる格下のクモを指して「ダシ」と呼称することもある。一方、出場候補のクモが敗北してしまった、すなわち出場候補から外れることとなった場合は、そのクモが次の出場候補のクモと闘う。つまり「ダシ」として用いられることとなる。

出場候補のクモの選別であるが、大会直前まではクモが負けを経験して臆病になってしまうことを

避けるため闘わせることはほとんどせず、そのためクモの外見から判断することとなる。そのときの判断材料は Ba 氏や Bc 氏の場合、主に体格と体色、そして産卵と脱皮の状況である。まず体格であるが、基本的に足が長く太いことと、「ドン（腹部）」が小さいことが重視される。闘いにおいて武器となる足の大きさは単純にクモ同士が組み合った際の優劣に影響するとともに、腹部が小さいということは体が軽いということであり、棒の上から落ちれば負けである試合において有利に働く。この体格に関する判断は先述の Aa 氏と Ba 氏をはじめ、多くの大会参加者に共通しているものである。

次に体色であるが、これは足に白い模様の少ない「クロテ」もしくは「クロゴテ」と、体が赤みがかった「アカヒ」が強い個体とされる。詳細な根拠は不明であるが、これらの特徴を持った個体はなかなか採集できず、1 年で 1 ～ 2 匹程度であるという。また、上述した中で Ba 氏は潮風に吹かれて育ったクモが強いとされていたという記憶を語っていたが、それと関連して、Ba 氏が小学生の頃は潮風に吹かれるなどして体が汚れたクモを「ヨゴレテ」と呼び、強いクモとしていたという。ただ、現在においては個体の強さを判断する際、体色による基準はほとんどの大会参加者の間で信憑性を失っていると Ba 氏は語っている。

最後に産卵と脱皮の状況についてである。コガネグモは試合に出場できるまでに育った後も数回脱皮することがあり、さらに大きく成長する。当然、一番最後の脱皮を終えた個体であればそれだけ体格は大きく、育成では餌を与えることでこの脱皮による成長の幅を大きくしているのであるが、脱皮直後の個体はまだ体が柔らかいため闘わせるには向かない。宮崎県から大会に出場している Ea 氏は、氏が「ヘソ」と呼称しているクモの体の裏側の頭胸部と腹部の間にある突起が無くなっていれば、最後の脱皮を終えていると判断しており、また、脱皮から充分に時間が経過していない個体のことを「ケが柔らかい」と表現していた。また、試合で闘うクモは雌の成体であるため、餌を与えすぎると産卵をすることがある。産卵を控えたクモは腹部が大きく膨らんでいるため体が重く、体格の要素から考えれば産卵させてしまった方が出場には好ましい。しかし、産卵直後のクモは気性が荒いため一回の試合には強い一方、体力を消耗しているため連戦には向かないという弱点がある。そのため、勝ち抜き形式の「合戦の部」が行われる「姶良市加治木町 くも合戦大会」では基本的に出場には選ばれない。つまり、卵を孕んでいるクモについては、大会前の早い段階で餌を多く与えるなどの方法で産卵をさせてしまうといった調整が必要になるのである。

脚や腹部の形状や色彩といった、体格と体色についての要素は、パンフレット内の試合ルールについての記述にあった「優良ぐもの部」における審査項目とも共通している。体格の点で見れば、「優良ぐもの部」で好成績を出すクモは体が大きく、試合でも勝利することが多いため、Ba 氏はこの部門に出場させるクモを合戦の部にも出場させている。合戦の部においては参加者 1 人につき手持ちのクモは 3 匹であるため、試合に出す順番も含めて出場させるクモを決めなくてはならない。このとき、「優良ぐもの部」に出場させたクモは 1 番目、Ba 氏曰く「先鋒」として出場させるのだという。

上記のように、大会当日に出場するクモが決められる。大会直前のこの作業は、実際に闘わせることでクモの強さを測るのみではなく、「ダシをつける」、つまりコンディションを整える目的もあるのである。

この選別作業の翌日、「姶良市加治木町 くも合戦大会」が午前 7 時 30 分から午後 4 時の一日をかけて行われることとなる。B 一家をはじめとした大会参加者たちは、自動車にクモが入っている網袋

を積み込み、大会会場へ向かう。大会中、会場となる加治木福祉センターの体育館では、参加者が持ち込んだこうした網袋がそこかしこに吊るされている様子を見ることができる。

写真 6：試合会場内に吊るされている、クモを入れた網袋。 2018 年 6 月 17 日 筆者撮影

Ⅲ．クモ合戦における“ヒトとクモ”、“ヒトとヒト”の関係

(1) 大会という場の役割

クモ合戦は勝ち負けの存在する遊びであるが、生き物を競わせる以上そこには人間には制御しきれない偶然性が存在する。それでは、クモ合戦に興じる人々は勝負の行方をどれほどクモに委ねているのだろうか。今回事例として扱った「姶良市加治木町 くも合戦大会」におけるクモ合戦に限って言えば、大会の参加者はかなり積極的に勝負の行方を操ろうとしているといえる。

事例整理で項目として分類したように、加治木町のクモ合戦において大会への参加者が特に重視している要素は大きく“採集”と“飼育”に分けて考えられる。採集の段階ではそれぞれの参加者はより大きなクモが多く生息する場所を求め、自分が見つけた採集場所を他の参加者に対して秘密とし、また飼育の段階ではさらに強くクモを育て上げるために様々な観察と工夫を重ね、餌の与え方などの技術を洗練させていく。つまりクモ合戦の勝敗の行方を決める要素は、試合でクモ同士を向かい合わせたときに全て委ねられているのではなく、大会当日を中心としたスケジュールを視野に入れ、早い者ならばクモの採集を始める 4 月上旬の時点から、大会で勝利を収めるまでの戦略を描き、行動していると考えるべきである。このような、勝利のための手法は事例の中でも述べたようにほかの参加者には秘密にするものとされている。であれば、加治木町のクモ合戦について為された試行錯誤は誰に

も共有されずに一代限りで途絶えてしまうのだろうか。

実際にはそうではなく、クモ合戦に関する知識は本稿中で見てきたように、飼育場やそこで育成されたクモを共有するいわゆる“チーム”の中である程度伝えられている。そして、そのチームは多くの場合、複数世代にわたる家族である。

クモ合戦にて勝利を収めるための手法の伝承は、現在においては大会という場の上で行われている。まず、誰よりも強いクモを目指して競い合われるクモ合戦の技術は、大会の試合を勝ち進み、最終的には王将戦の部にて優勝するためのものである。大会当日に向けて組まれた採集、育成のスケジュールもまたそこに深く関わっている。その洗練された技術のひとつとしての大掛かりな飼育場と、家族での大会参加をはじめとした参加者のチームの存在は、クモ合戦にまつわる技術を複数人が共有するきっかけとなっている。以上のように、「姶良市加治木町 くも合戦大会」はこの地のクモ合戦にまつわる知識や文化が伝承される機会としての役割を果たしているといえる。

また、A 一家と B 一家の事例のように、この大会は息子、娘の世代が実家へ帰省するきっかけにもなっている。Ba 氏がクモを育てる飼育場には、B 一家がこれまで受け取ってきた表彰状が飾られている。大会というひとつの目標を通し、家族の交流の機会が生まれているともいえる。

(2) 加治木町のクモ合戦の特徴：闘コオロギについての先行研究と比較して

では、「姶良市加治木町 くも合戦大会」で行われているクモ合戦について、他の生き物を闘わせる遊びと比較したときにどのような特徴を挙げることができるだろうか。

今回はクモ合戦に近い形のテーマを扱った研究として、本稿冒頭でも挙げた中国における闘コオロギに対する研究を比較対象として取り上げることとする。菅豊は中国都市部にて行われている闘コオロギについて、それを取り巻く人間同士の関係と、闘コオロギを通して見ることができる人間の自然観について論じた (菅 1999)。菅が記述した闘コオロギの事例では、採集や、飼育用具の製作といった各場面が分業によって行われ、それぞれに異なる人間が関わっている。特に採集においては、コオロギを採集して販売する者と、実際にコオロギを闘わせる者との間でコオロギに関して持っている知識が全く異なるという点が特徴的である。菅は、地方に居住し生活圏内に生息するコオロギを採集する「生産者」は、西洋由来の昆虫分類学とほぼ同様にコオロギを一種類の生物として認識しているとし、これに対し、都市に居住し、身近には生息していないコオロギを「生産者」から購入し闘わせる「消費者」は、コオロギを「闘コオロギ」としてさらに細かく分類し、人間が作り上げた「花鳥魚虫文化」の世界観の中で扱っているとした。一方、本稿にて事例を扱ってきたクモ合戦では、クモの採集から試合までがほぼ同じ人間によって行われ、分業化は為されておらず、菅の述べているところの「生産者」と「消費者」は同一の人間であるといえる。その上で、加治木町ではクモと戦国武将の伝説を結びつけたり、闘わせるだけでなくその美しさも競うなど、クモもまた人間が作り上げた文化の世界観の中で扱われているといえる。加治木町でクモ合戦を行う人々は、野外に生息するコガネグモの生態に直に触れた上で、クモ合戦という遊びを通してそうした視点を得ているのである。

さらに、闘コオロギについては中国の唐代からコオロギを採集し、育成し、闘わせる技術を記した文献が伝わっているとされる。Hugh Raffles はこの闘コオロギにおける技術に数世紀前から文字としての蓄積が存在していることを取り上げ、現在においてもコオロギの育て方、個体の見分け方などに

ついての説明には１世紀も前の記述が引用・参照されていること、言いかえれば、現在においても数世紀前の飼育方法が根底に用いられていることを指摘している（Raffles 2011）。しかしながら、それだけの長い歴史を連続して持っているにもかかわらず、闘鶏などのように闘うコオロギの累代飼育や品種改良といった、完全な家畜化は行われていないことを菅は紹介している。クモ合戦においても、前述の Ea 氏の事例のように、多くの参加者の間には普及せずに個人的な試みとして行われているのみで、家畜化が成功しているとはいえない。これは先述した採集・育成の分業化といった相違点とは異なり、闘コオロギとクモ合戦の共通点といえる。生き物を闘わせる遊びの文化について、闘牛や闘鶏、闘犬のように家畜化が盛んに行われる事例と、ここで挙げた闘コオロギやクモ合戦のように家畜化が進まない事例との間にどのような違いがあるのかについては、今後明らかにすべき課題のひとつである。

ここまで挙げた菅と Raffles の研究にて明らかにされているように、闘コオロギにおいては採集・育成それぞれの段階の分業が行われている上に、手法の文字化、つまり誰もが参照できるような普遍化も為されている。これらの要素は、加治木町のクモ合戦と比較したときに最も異なる部分であるといえる。加治木町のクモ合戦では採集から飼育、大会出場までを同一人物、あるいは同一のチームが行う。また、それにともなってチームの外へは多くの場合秘密とされるクモ合戦の知識は、それぞれの参加者によって保持され他人からは参照されない、ある種職人芸的なものとなっていっているといえる。

また、加治木町のクモ合戦におけるチームとして、最もよく見られるのが家族というまとまりであることも大きな特徴である。これは前述のように、大会出場のために多数のコガネグモを同時に飼育するためにはある程度以上広く、立体的な空間が必要であり、そのために飼育場として家屋の一部が多く用いられることが理由として挙げられる。これも、手の平大の容器で飼育することが可能なコオロギとは異なる点である。

おわりに

本稿では「姶良市加治木町 くも合戦大会」にて行われている多様な取り組みの中でも、クモの採集と育成について重点を置いて論じた。その結果として、クモ合戦に関する手法・知識を共有し、伝承する“チーム”として、一部例外はあるものの、家族という単位が大きな意味を持っていることを指摘した。また、加治木町のクモ合戦では知識の普遍化が為されず、不特定多数によって共有されていない知識が多く見られ、それぞれの家族によってクモの知識に相違が存在することが明らかになった。特に、前者の特徴については、コガネグモが飼育のために広い場所を必要とすることと関係している点において、コガネグモを用いて、しかも一度に多くの個体を同時に飼育する加治木町地域のクモ合戦特有のものであるといえる。

人間が生き物を使役し、闘わせる遊びは世界各地に多様な種の生き物を用いる例が見られる。それぞれの事例において、異なる生き物に対して人間がどのようなアプローチを行っているのか。また、その遊びを中心として人間同士はどのような関係性を築いているのか。それらをひとつひとつ具体的に明らかにしていくことは、最終的に同種の遊びの文化全体を論じていくにあたって意義を持ってく

るものであると考える。今回は基本的に他の事例との相違点を明らかにすることで、加治木町におけるクモ合戦文化の特徴を整理することを目指したが、事例検討の中で言及した家畜化に関する闘コオロギとの共通点のように、ある部分においては複数の事例を共通する特徴を持ったグループとして扱うことも可能ではないだろうか。そういったより広い視野に立った研究につなげていくためにも、今後、他地域で行われているクモ合戦なども含めた各事例に対する調査研究を慎重に積み重ねていきたい。

註

(1) 「横浜ホンチ保存会ブログ：トップページ」2021 年 3 月 27 日閲覧

(2) 「富津フンチ愛好会オフィシャル HP：はじめに」2021 年 3 月 27 日閲覧

参考文献

・姶良市加治木町くも合戦保存会 (発行年不明)『くも合戦大会規則』私家版

・石川菜央 (2004)「宇和島地方における闘牛の存続要因 : 伝統行事の担い手に注目して」『地理学評論』77:957-976

・石川菜央 (2005)「隠岐における闘牛の担い手と社会関係」『人文地理』57(14):22-43

・卯田宗平 (2017)「手段としての動物と人とのかかわり : 共通した動物利用の論理を探る : 共同研究 : もうひとつのドメスティケーション : 家畜化と栽培化に関する人類学的研究」『民博通信』158:14-15

・小川了 (1975)「フランス北部における闘鶏士社会」『季刊人類学』6(3):32-72

・鹿児島県姶良市企画部商工観光課 編 (2019)『島津義弘公没後 400 年記念 (祝プロジェクト未来遺産 2018 登録) 姶良市加治木町くも合戦大会』姶良市加治木町くも合戦保存会

・加治木町教育委員会 編 (1999)『加治木のくも合戦の習俗調査報告書 : 加治木町文化財調査報告書』鹿児島県加治木町教育委員会

・加治木町文化協会「加治木文化」編集委員会 編 (1997)『加治木文化』加治木町教育委員会

・川名興・斎藤慎一郎 (1985)『クモの合戦　虫の民俗誌』未來社

・川名興 (1992)「くも合戦覚え書き」谷川健一編『動植物のフォークロア Ⅰ』三一書房

・ギアーツ .C 著 ; 吉田禎吾 [ほか] 訳 (1987)『文化の解釈学 Ⅱ』岩波書店

・斎藤慎一郎 (2002)『ものと人間の文化史 107 蜘蛛』法政大学出版局

・菅豊 (1999)「闘コオロギからみた中国漢人都市民の自然観」『北海道大學文學部紀要』47(4)：25-92

・西村明・桑原季雄・尾崎孝宏 (2007)「東アジアにおける闘牛と「周辺―周辺」ネットワークの形成」『South Pacific Studies』27:53-72

・八木沼健夫 (1986)『原色日本クモ類図鑑』保育社

・Raffles,Hugh (2011)Insectopedia,Vintage; Reprint.

・「横浜ホンチ保存会ブログ：トップページ」http://honchiyokohama.blog.fc2.com/ 2021 年 3 月 27 日閲覧

・「富津フンチ愛好会オフィシャル HP：はじめに」https://www4.hp-ez.com/hp/muetaican121/ 2021 年 3 月 27 日閲覧

謝辞

本稿の執筆にあたっては、姶良市加治木町くも合戦保存会の皆様、姶良市加治木町くも合戦大会関係者の皆様、姶良市加治木郷土館様より、多大なるご理解とご協力をいただきました。この場を借りて、心より御礼申し上げます。